

研究主題「主体的に学習に取り組む態度を養う表現運動系領域の指導の在り方 ー児童が運動への興味・関心を基に自己選択と自己決定を繰り返す 探究的な学習を通してー」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
杉並区立桃井第三小学校 主任教諭 梅林 伸幸

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）において、体育科の目標は、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することとされている。中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（令和3年1月26日）では、必要な資質・能力について、主体的に学ぶことの重要性が指摘されている。東京都教育施策大綱（令和3年3月）には、児童一人一人に着目して、自立性や主体性などを伸ばしていく学びへと教育の在り方を転換し、すべての児童が自ら学び、育つためには、児童のもつ力や伸びようとする意欲を引き出し、探究的・主体的な学びを導くことが必要であると示されている。そのため、指導者には、児童一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割が求められている。

表現運動系領域（以下、表現運動と言う。）は他の多くの運動領域とは違い、技や技能のように一定の方向に高めていく学習ではなく、自由に表現する学習が展開されていることに大きな特徴がある。児童の主体性がより充実する領域と考えられる。

以上のことから、主体的な学びを引き出すため、児童が興味・関心を生かして自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど、児童一人一人が選んだり、決めたりできる条件や環境を整えることが必要であると考えた。そこで、「自己選択」と「自己決定」という言葉をキーワードに研究を進めることとした。「自己選択」は、多様な設定から自ら選ぶことと捉え、一人一人の多様な学びを引き出すことを、そして、「自己決定」は、主体の源となる自ら決めることと捉え、児童の主体性を内発することをねらいとした。「探究的な学習」とは、運動への興味・関心を生かして、自ら選び決め、自ら学びを進める学習と捉え、児童一人一人の主体的な学びを最大限に引き出すことをねらいとした。

本研究では、表現運動系領域の学習を通して、児童が運動への興味・関心を生かして学習課題や学習方法等を選んで決める「自己選択」と「自己決定」を繰り返す探究的な学習を展開することによって、主体的に学習に取り組む態度を養うことをねらいとする。

第2 研究仮説

表現運動系領域において、児童が興味・関心を生かして学習課題や学習方法等を選んで決める「自己選択」と「自己決定」を繰り返す探究的な学習を展開することによって、自由に動きを工夫して楽しむことができ、主体的に学習に取り組む態度を養うことができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣調査報告書の分析

報告書によると、運動が苦手な児童の「できなかったことができるようになったきっかけ」では、「授業中に自分で工夫して練習した」、「自分に合った場やルールが用意された」の数値は他の項目と比べると低い。これまで以上に個に応じた指導の充実を図り、児童自ら興味・関心や意欲に合わせて学習方法等を選んだり決めたりすることを通して、できるようになる経験を増やしていくことが必要であると考えた。

(2) 表現運動における技能の捉え方と特徴の分析

表現運動は、題材から捉えたイメージを表現するための多様な技能が求められる。つまり、表現運動は、具体的な技を段階的に習得したり、勝敗を競ったりする領域とは異なり、同じ題材でも捉えたイメージや表現方法によって、よい動きが様々であることに特徴がある。ここに表現運動の特性と動きの面白さがあり、同時に指導と評価の難しさもある。また、運動ができたかどうかを児童が適切に自己評価することが難しいことも課題であることが分かった。

2 調査研究

(1) 調査の概要

令和3年9月に都内公立小学校の第3学年児童71名及び体育科指導の経験がある教員17名を対象に、体育科の学習や指導についての意識調査を行った。

(2) 質問紙の調査結果

児童、教員共に、ほとんどの項目で肯定的な意見が見られた。(表1)「学習するための計画を自分で立てること」に関する肯定的な意見は、児童66.2%、教員47.1%だった。児童の主体的な学びを実現するために、これまで以上に、児童が「自己選択」や「自己決定」する場面を多様に設定した学習過程を考案することが必要であると考えた。

表1 質問紙の肯定的な意見の割合(%)

質問項目	児童	教員
体育科の学習は好きである	92.9	
体育科の学習指導は得意である		29.4
運動にすすんで取り組むこと	93.0	100
運動やめあてを自分で決めること	84.5	94.1
できるようになるための方法を選ぶこと	86.0	94.1
学習するための計画を自分で立てること	66.2	47.1

n=71(児童) n=17(教員)

児童対象の「体育科の学習は好きである」の肯定的な意見は92.9%だった。肯定的な回答をした児童は、「体を動かすと楽しくてスッキリする」や「みんなで楽しめる」、「できると楽しい」、「工夫すると楽しい」という理由を挙げた。否定的な児童も楽しさや有能感を味わうことができるようにするために、表現の特性に触れる楽しさを重視した導入の工夫、自分の伸びを実感できるような手だてを講じる必要があると考えた。

また、教員対象の「体育の学習指導は得意である」の肯定的な意見は29.4%であり、苦手と回答した教員の記述には、「コツやポイントの指導に難しさを感じる」、「指導力に自信がない」、「効果的な言葉掛けが分からない」、「児童の技能の差が大きく、めあてや場の設定が難しい」という理由が挙げられた。このことから、指導事項を明確にした資料等が必要であると考えた。

3 開発研究

(1) 「よい動き」(技能のポイント)や「5点の工夫」の整理

学校体育実技指導資料第9集「表現運動及びダンス指導の手引」(平成25年3月文部科学省)に示された表現運動の技能のポイントを「よい動き」として児童に示した。(表2)そして、

「主体的に学習に取り組む態度を養う表現運動系領域の指導の在り方
 ―児童が運動への興味・関心を基に自己選択と自己決定を繰り返す探究的な学習を通して―

体全体で動きを大げさに誇張したり、変化とメリハリを付けたりすることができるように、「5点の工夫」に整理した。(表3) また、系統性を踏まえ、発達の段階に応じた工夫の観点の重点も明確にした。

表2 「よい動き」(表現運動の技能のポイント)

技能のポイント (学校体育実技指導資料 第9集)	「よい動き」(児童への提示)
○表したいイメージにふさわしい動きを見付けることができる。 ○全身を使って、大げさに表現(誇張)することができる。 ○動きに変化を付けてメリハリのある表現にすることができる。 ○動きをスムーズにつなげて連続させ、気持ちも途切れずに踊ることができる。 ○感じを込めてなりきって踊ることができる。	「特徴を捉えて」 「体全体で、大げさに」 「変化、メリハリ」 「続けて、切れずに」 「感じを込めて」

表3 「5点の工夫」と系統性の重点

学校体育実技指導資料 第9集 観点	5点の工夫		系統性の重点		
	工夫の観点	身に付けさせたい動き例	低学年	中学年	高学年
空間一体幹	動き	ねじる 転がる 跳ぶ 這う 等	◎	○	
時間	リズム	速く 遅く 止まる 等	○	◎	
力性	メリハリ	急変 逆 強弱 大小 等	○	◎	
空間一軌跡・隊形(群構成)	関わり	対応する動き 対立する動き 等		○	◎
	空間	前後 左右 上下 広く 高低 等			◎

(2) イメージカードの開発

基礎研究で整理した技能のポイントや「5点の工夫」の観点を基に、身に付けさせたい動きを言葉とイラストで表し、準備した。(表4) 児童はイメージカードを選んで即興的に表現する活動を楽しく繰り返すことで、必要な動きや技能が身に付くと考えた。

表4 イメージカード

5点の工夫の観点	動き	リズム	メリハリ	関わり	空間
身に付けさせたい動き例	ねじる 等	遅く 等	強弱 等	対応 等	広く 等
イメージカード例	ダイオウイカにつかまる 	無重力の宇宙遊泳 	よせたりひいたりする波 	クラゲたちのダンス 	イワシの群をおそうサメ 

(3) 「自己選択」と「自己決定」を繰り返す探究的な学習過程の工夫

児童が運動への興味・関心を生かしながら、学習課題や学習方法等を「自己選択」と「自己決定」ができる機会を多様に設定した学習過程を作成した。(表5) 第1時は、表現の特性に触れる楽しさを重視した導入とした。この運動とのよい出会いが、主体性に大きく影響すると考え、「これなら自分もできる」と有能感が感じられることができるよう、誰でもできる易しい運動から始める工夫をした。第2時以降、児童の実態に応じて、意図的に学習課題や学習方法等を「自己選択」と「自己決定」する機会を増やし、多様に設定した。

表5 学習過程例

第1時(単元の導入)	第2時以降(児童の実態に合わせて段階的に自己選択・自己決定する場面を増やす)
【教員】 ○特性に触れる楽しさを重視 ○有能感を感じさせる ・誰でもできる易しい運動から始めることが大切 【児童】 ○「この運動って楽しい」 ○「もっとやってみたい」 ○「これならできそう」	【教員】 ○児童の自己選択・自己決定を促す(段階的に機会を増やしていく) ○「よい動き」(技能のポイント)や「5点の工夫」に即した価値付け ○個別の支援や言葉掛け 【児童】 ○学習課題や学習方法等を自己選択と自己決定する ・学習課題(「よい動き」や「5点の工夫」から選んだり決めたりする) ・準備運動や主運動につながる活動(自分に合った活動を選ぶ) ・主運動等における学習形態(人数)や学習方法(イメージカード等) ・交流方法(友達と見合う、一人1台端末の活用、教員のアドバイスをもらう) ・振り返り(紙ベース・一人1台端末の活用)

4 検証授業(令和3年10月・11月実施)

都内公立小学校にて第3学年を対象に、表現運動「〇〇探検(空想の世界からの題材)」(全

6時間)の検証授業を実施した。

(1) 「よい動き」(技能のポイント)や「5点の工夫」の有効性

単元が進むにつれて、学習カードにおける「5点の工夫」に関する記述が増えた。児童は何が「よい動き」であるかが分かり、技能に関する課題の意識が向上したことが分かった。また、授業の目標の実現状況を児童に問う形成的授業評価(3件法)を、毎回授業後に行った。「成果」は単元が進むにつれて向上が認められた。(図1) 教員が授業中の価値付けや学習カードのコメントを、「よい動き」や「5点の工夫」に即して行うことで、児童が自分の伸びを実感できるようになったことが分かった。

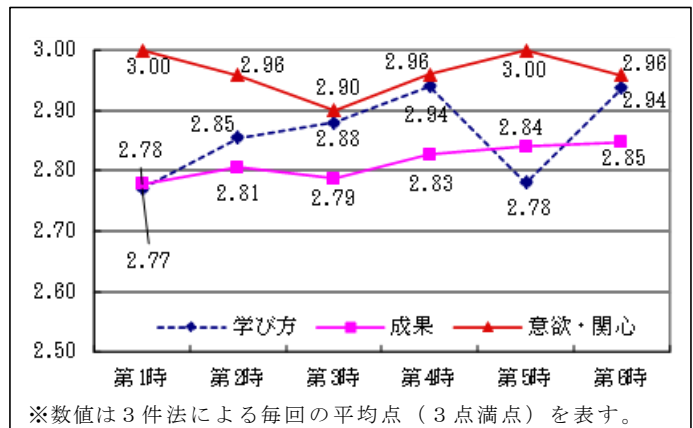


図1 形成的授業評価の観点の推移

(2) イメージカードの活用の有効性

カードを裏にして床に並べ、偶発的に様々な動きや即興的な動きを楽しむ姿が見られた。また、カードを表にして置くことで、自ら決めためあてや表現したい動きにつながるカードを選び決める姿が見られた。さらに、学習カードにおけるイメージカードに関する記述から、イメージカードが「よい動き」へのヒントになったことが分かった。

(3) 「自己選択」と「自己決定」を繰り返す探究的な学習過程の工夫の有効性

形成的授業評価の「意欲・関心」は単元を通して高い数値であった。「学び方」は「自己選択」と「自己決定」の場面を多様に設定していくほど向上が認められた。(図1) 単元後に、体育に関する意識調査を実施した。単元前と比較すると意識の向上が見られた。(表6) 更に、単元前後の回答において、統計処理をした結果、「運動やめあてを決める」、「できるための方法を選ぶ」、「学習の計画を立てる」の3項目において、単元後の回答で特に有意な差($p < 0.05$)が得られた。

表6 体育に関する意識調査(4件法)の平均値(4点満点)

	体育の学習は好き		運動にすすんで取り組む		運動やめあてを決める		できるための方法を選ぶ		学習の計画を立てる	
	単元前	単元後	単元前	単元後	単元前	単元後	単元前	単元後	単元前	単元後
第3学年 (26名)	3.67	3.83	3.79	3.81	3.46	3.77	3.29	3.73	3.13	3.77

第4 研究の成果

児童が「よい動き」や「5点の工夫」、イメージカードを基に、興味・関心を生かして、学習課題や学習方法等を選んで決める「自己選択」と「自己決定」を繰り返す探究的な学習に取り組むことで、自由に動きを楽しむことができ、主体的に学習に取り組む態度を養うことができた。

第5 今後の課題

- ・ 児童が「自己選択」と「自己決定」する場面を設定する上で、より児童一人一人に合った支援の仕方について検討する必要がある。
- ・ 低学年の表現リズム遊びや高学年の表現運動との系統性を踏まえて、「自己選択」と「自己決定」ができる場面を段階的に設定した学習過程を考案する必要がある。